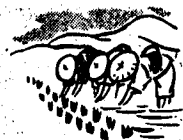




筆のさんぽ道



ある会合で最近こんな話が出て話... 最近の和泉村の農業技術というものは非常に発達した。米なんか十年も前のほとんど倍近く取れる様になった。今の作り方を昔の作り方に比べて見ると、実に合理的、科学的になつて来ている。その進歩におどろく。この様にたしかに農作物の生産技術は進んで来た。

貯蓄の習慣をつけよう

貯蓄は一つの習慣だと思ふ。もし貯蓄になにか特別の秘訣があるのだらば、それは少しでも早く貯蓄を習慣として、自分の身につけてしまふことではなからうか。誰でも経験のある事と思ふが、子供のとき、朝晩無理矢理に歯を磨かされるのは、大変苦痛な事であると思ふ。ところが一たん習慣となつてしまふと、少しも苦痛や負担を感じなくなつてくる。そればかりか歯を磨かずに床に入ると、気持ち悪くて寝つかれないと言つて程になつてくる。

始めてポンプ 操法を習つて

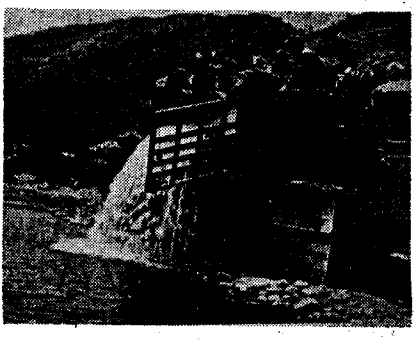
私達婦人会は五月七日、和泉村消防団長さんをはじめ部落の消防団の方々の御指導にて、ポンプ操法を教へて戴きました。始めは細かい事は習わなくても水さえ出ればよいと簡単に考えていましたが、いざポンプの前に立つて細かい機械の説明、動作の順序などについてお話を伺つてみると、簡単に出来るものではありませんでしたが、次の二つが操法の重要な事である事を知りました。

母を賛えて

母は今年四十八歳です。母は大変よく働きます。でも私たちがいつまでも寝ているので、母は「早く仕事にかかれなくて困る」といいます。本当に済まないと思ひます。でもそう思ひながら、ついねすこしてしようの事です。母はこの四月に入ると、とても体がつかれるそうです。母が一番ゆつくりしていられるのは、四季の中で冬です。だから四月になつて急にはげしい仕事を毎日毎日するので、夕方になるととくにたかたかたつてくるのです。それなのに家に入ると、休まずに又、家の仕事をします。そして時々冗談交りに「こんなにつかれては、田植の時などつとまるやうか」といつて笑います。

部落探訪

川合部落の平野家 全国いたる所平野源氏のゆかりある部落は極めて多いのであるが、川合部落もその例に洩れず、往昔平野氏の居所として只に伝説でなく、角野前坂の氏神へ寄進状が提出され、それが大野郡誌に載せられ、福井県「越前」の川合郷の考証の有力な参考となつてゐる。然し又標題の平野家の如く、全く素地屋の子孫として明瞭な証拠となる貴重な記録、家宝等を所持しているのは極めて珍しい。



一休山間地には古来素地業を生業として山合、谷合に転々として素地業に従事し、全国を歩いてきたが、土地の人々とは殆んど交際せず婚姻なども交す事はなかつたので土着するものも極めて稀になつた。大倉、小原、紀とかいふ性は殆んどこれに類するものと考へて間違いない。

靖国神社参拝を迎えて

五月二十七日に亡き父上の霊前に参る私は父上のおそばに行く日を一干秋の思い出で待っている。私の大切な父をあの恐ろしい戦争が殺してしまつたのです。何も知らない私は母の胸に抱かれていたのだらう。兄も私もこんなに大きくなつたのを一目でもいからず祖先の高貴を誇るために別々の氏神を祭つていたことが想像される。それほど素地屋業は平城天皇の皇子高丘親王の子孫として、全国いたる所の如何なる人の所有地も無断で生業を営むやうに許可されていた事を証するもので、これが今もなお貴重な証品を保管して名望家として村内にあることは喜ばしいことだ。学界の権威者も時々同家を訪れて色々調査されている。もしこの外にもこれに類する家があつたら大切に頂きたい。なお同家には大野藩の軍管の所有していた極めて立派な鎧かぶと一揃がある。

僕のお母さん

四年 谷口雅治

僕のお母さんは、まだ僕の二つになつた時、福井へいつて二年ほど福井で仕事をしていたが、僕の五つの時うちへ帰つてきて色々僕の世話を見て下さいました。お母さんは、よくに「もう五つになつたのだから、お母さんは福井へいつてもよいだらう。そのかわりごん度帰つて来る時はいい物を買つて来てあげるよ」と、いいました。僕は「ラッパを買つて来て」といひました。そしてお母さんはまた福井へいきました。それから僕は六つになりました。そこへ僕がいつた「ラッパ」をおくつて下さいました。よくがそれをもつてあそんでるうちにまた一年たちました。

人のうらみ

米俵 池尾 俊雄長男 春美 伊勢 三島又右衛門三男賢二 上大納 古川幸三郎長男 幸雄 朝日 宮原 高司二女 実穂恵 下山 島喜 市四男 智春

【出生】 和泉村下山 山口 豊成 和泉村長野 牧嶋 ゆき 和泉村長野 伊藤 敏男 和泉村米俵 山本 忠子 和泉村松ヶ枝下町 森 友治 和泉村後野 東守 さむ 和泉村鷲 大町 政敏 岐阜県掛妻郡掛妻川町 中沢 五月

【死亡】 長野 村下 竹蔵 五八歳 角野前坂 平瀬 とき 八一歳



君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ 君のうらみ